

海がないのになぜ？ 全国の釣りばりの約9割「播州ばり」

播州ばりは、農家の副業として小寺彦兵衛が土佐（今の高知県）から現在の加東市に釣りばり作りの技術を持ち込んだことに始まります。また、三木の金物づくりで出た金属のくすなどを釣りばりの材料として使えたことが、釣りばりづくりが広まった理由だと考えられています。現在、全国の釣りばりの生産量は西脇市と加東市を中心とした地域でし90%以上を占めています。近年では、世界各国にも輸出されています。

「MADEIN 加古川」のくつ下を目指す

かつて、東播磨地域の田畠には、くつ下の材料でもある「播州木綿」といわれる上質の綿花が栽培されていました。全国三大生産地である兵庫県のくつ下の多くを生産している加古川市周辺。製造業の多くが製造コストの安い海外での生産が主流となっている中、地元で無農薬栽培した綿花から地域ブランドであるくつ下を作る取り組みを始めました。地元小学校の子どもたちも一緒に綿花の栽培・収穫を行ったりしながら、本当のメイドイン加古川のくつ下を製作しています。